

国木田独歩の佐伯での生活 (五)

山内武麒

(賛助会員・佐伯市城下東町)

二十一日の記には

昨夜当地に來りて始めて教会堂に出席す。会する者、

吾等兄弟の外に四人。

怪しげなる一室に此少数が声を張り上げて歌ひ、涙をのみて禱る。少数と雖も其の壯嚴なるを失はず。

と、ある。葉師寺氏の勧誘に應じて、佐伯に來て始めて教会に出席したのである。この頃の佐伯では基督教信者は極く少数で、教会堂と云つても独立した建物ではなく、新屋敷の民家の一室を借りて教会堂に当てゝいたという。僅か六人の集まりであつたが、声を張り上げて讚美歌を歌ひ、涙を呑んで祈禱を捧げる若者達の姿はいじらしく、壯嚴さを少しも失わず、独歩は心から満足している。

二十三日の記

吾いま午後の授業を終へ、帰り坐して茲に在り。暮

雲ものさびしく黄昏の氣靜かなり。

と、書き出してある。午後の授業は三時半から始まって五時半に終り、夜の授業は八時半に始まるので、その間に一旦家に帰つて夕食を摂るのである。家に帰つて机に向つて日記を書いている。

近頃は筆を採ることが稀れである。感じるものが少ないからか、いや、見るものは少なくない。それで感じることも多い。たゞ筆を採る機会が少ないのである。と述懐して、二十一日の城山登りのことを記してある。

二十一日午後三時半頃から収二を連れて城山に登つた。それは窓から眺めたとき遠い山々が近くに見え、秋の氣高く空の色がよく澄んでいるのを見たから、きつと夕陽が美しいだろうと思つて登つたのである。

眼下に見おろす佐伯市街、山々にかゞやく落暉、河
流、空色、遠海、四国地の煙山、或は山谷の村落、或

は岸辺の孤帆。

と、夕方の美しさを述べ

自分に大きな自然、美しい自然と人生とを連想させないものはない。自分にこの自然は人類を考えさせ、歴史を考えさせ、生死を考えさせる。また人類を導く英雄を考えさせ、人間一生の運命を考えさせる。

町は社会を代表し、人間関係をあらわすものであり、競争、怨恨、義侠、謙遜、虚栄、偽善などの性質を示すものである。

ところがあの山、あの流れ、この空の色、この草木の緑、限らない大空、これらは悉く自然の大と無限無窮と靈妙とをあらわしている。と比較して、最後に

吾をして只だ最後に神聖の全能全智なる主に向て叫ばしむの外あらじ。

と、神にすがっている。

二十二日は日曜日であったので早朝収二と一しよに中野村の小川の銚子淵に遠足している。

独歩兄弟は日曜日毎に殆んど遠行してあちこちと探策している。仲のよい二人は何時でも連れ立って行った。

町の人々はこの仲のよい兄弟が連れ立って歩く姿を見て「おみきすずのようだ」と評していた。

二十四日の記は夜の授業が終って帰って机について書いてある。

本日昼食前独り外出、招魂場の石上に坐し、沈思する処あり。

と、あり、次にその沈思したことを記してある。

自分はまだ自分の完全な独立を見出すことが出来ない。それは自分のもつ一つの靈魂が自分一個の靈魂として独立して、自然に向い神に向うことが出来ないことを知っている。

その証拠には自分はまだ全く世から離れ、人を忘れて、たゞ一人限りになつても考え為すことが出来ない。自分の身は社会取引の波風の中にたゞよい、自分の心は社会の流れからの影響から脱け出ることが出来ない。と反省している。独歩の謙虚な心が察しられる。

そしてまだ自分は自然の児になることが出来ない。これが自分の苦痛である。また自分はシンセリティになり得ない。情けないことである。

自分の断えない煩悶はこれである。

と、反省して

嗚呼余は心の最も底に憂を有す。神に祈る事は他に非ず。

吾をして今一層爾によりて立たしめ給へと云ふ事也。
吾をして今一層吾を独立のリールとして天地に見出だ
さし給へと云ふ事之れ也。

と、神に祈っている。

この当時の独歩は若者に似わずよく自己反省を重ねて
いた。真面目な若者であったのである。

二十五日の記はないが、この日独歩兄弟は山際の坂本
永年氏宅へ下宿することとなり、転居している。坂本氏
は鶴谷学館の幹事をして館長を兼ねていた。この転居は
坂本氏の一方ならぬ厚意によるものである。この時、下
宿代は二人で月八円だったと云う。

坂本家はこの当時と同じ姿のまゝ残り、独歩兄弟が起
居した室はそのまゝ残っている。

またこの日、友人の中桐確太郎に洪水見舞の礼と近況
を報せる手紙を出している。

君よ安ぜよ、洪水は随分甚だかりしも吾等兄弟は只
だ二回転居して之を避けたるのみ。別に一物の損害を
も被らざりし也。而して己に全く平日に復し又た洪水
の跡さへ見る可からざる程に至りぬ。大分県下にても
佐伯は水害尤も軽かりし也。

僕目下の事情は至極安静なり。学校の教授は日々務
め居るなり。先方の人々の氣に入らねば其れまでなり
と初めより無頓着にかまへ、只だ僕が尽すべき職分と
信ずる事を正直に尽すが故に、案外自由にして心安ら
かなり。されど殆んど三十名許りの青年少年が全く小
生の支配感化示教の下に在ると思へば責任の重さを感じ
窃かに恐るゝ所ある也。されど僕がすべては神に托
して在るが故に事の成否結果の如何感化の影響は只だ
神のまにまに僕は只だ為すべき事をなすの外あらじ
云々 (以下略)

と、ある。独歩の勤務ぶりがよくわかる。誠実で熱心に
教導に当る責任感の旺盛な人柄が推察される。

二十八日の記には

此頃の秋日の麗はしさよ。蒼穹常に晴れ渡り、大氣
いつも澄みて静かなり。山々も近く見へ、所々は紅葉
に飾らる、百舌鳥樹上に叫ぶ時は風徐ろに來る、潮満
つる時は夜氣軽く覆ふ、收穫の時なるが故には野には
終日農夫等の声充つ、嗚呼美しき秋は來りぬ。吾が愛
する春逝き夏逝きて而して秋來りぬ。

と、名文で秋たけなわの候の田園風景を叙してある。

そして、次に、年々歳々、等しく季節はめぐつて来る。自分をしてこの生命をその美に托して安んじさせてくれ、美なる哉自然！人は生命をその中に寄せるのはたゞ煩悶し苦吟するためであろうか。神は美に満ちた世界を人間に与えたけれども、悪魔が来てその人間の眼をくらませる。

と、季節の移り変りをひしひしと感じ、月日は過ぎていくと述懐している。

次に教会の様子を記してある。

過ぎる水曜日の夜、教会の祈祷会に出席して三三人の青年と共に祈祷した。自分は深くこの少年たちが単純で熱心に祈る姿を見て心から感激した。彼らと一しよに祈ると頭上に神が在ますような心地がする。神はこの自分を清い泉のように自然で美しい感情の持ち主たちの群の中に投げ入れ給うて下された。自分もまたこの者たちのために尽さねばならない義務がある。

と、少年たちの熱心な信仰ぶりに心から感激している。

そしてこの感激を早速翌二十九日、信仰の友である田村三治に報らせてある。

(前略)

茲に一つ実に愉快なる事有之候 此事は大兄に報知

する事丈けにても小生の心何となく躍る程に候 其れは外でもなし。当地教会の事に候 当地に一個の教会あり薬師寺育造氏と申してさきに関西学院に在りしと云ふ青年之を督す。会員十二名あり而し目下出席する能はざる事情の下に在る者四人を除けば他は大概出席し得る者に候 悉く青年也 而し其内の半ば小生の学校の生徒也 已に小生は聖書会に二回、祈祷会に一度出席致し候 明日は日曜日ゆへ出席致して感話致す都盛に候 会員諸子は小生の来りしを非常に喜び祈祷の際熱心に神に感謝致す程に御座候 讚美歌の時は三四の青年声を張り上げて歌ひ祈祷の時は涙を呑みて祈る 悉く直截真摯熱心思はず小生をして涙を流さしめ候 小生も出来る丈け教会の為に尽す覚悟に候 只だ直接に生徒に向て伝道致す能はずと雖も小生の来りし以来青年の風紀傾向己に何となく改り候由に聞き及び候 天父頭上より声を放て励まし給ふが故に小生も亦た躍り上がって奮発致し居候 吾が一番町教会に三年会員たらんより此單純淳朴なる青年の団体に半日加はる方如何にうれしきぞ 之れ矯語なる如きも小生の感情実此の如きを如何にせん 神は其の無理ならざる者あるを知り給ふと信ず。

小生の学校は鶴谷学館と称し小生は教師並に館長なり 又殆んど凡ての取しまり役也 三十名許りの青年少年は間接直接に小生感化の下に在ると思ふ時は責任も亦た決して軽ろからざるを知る也 (以下略)

と、ある。教会で可憐な青少年と接し、その真摯で熱心な信仰ぶりに強く心を打たれて感動し、その感激を信仰の友である田村三治に報らせたのである。

二十六日の夜は収二と共に月光を追うて葛港の海辺まで散歩している。

昨二十七日は一寸の間をぬすんで近くの川で釣をしてゐる。また昨夜は教会に出席した。

田村三治から手紙が来て、その中に先日送った富永徳磨君の作文(題「佐伯」)の評をしてあった。金子馬治君からも手紙が来た。

近くの川とは多分臼坪川であろう。この川は今ほ汚ないどぶ川になっているが、昔はきれいな水が流れ、海水が満潮の際にさし込んで魚が上って来ていた。よい沙魚はまの釣り場であった。

この日、記にないが友人の大久保余所五郎に手紙を出してある。

わざわざ御見舞被下難有存じ候 さり乍ら小生等別に洪水の爲めに何等の損害も被らず只だ三回避水致したる迄にて候間御安心被下度候 只今は最早洪水の跡もなし秋の日は麗はしく農夫は刈り入れにいそがしく百舌鳥は樹上に喧しく紅葉は山寺の門の傍に静かなり。

と、洪水見舞のお礼を述べ

此の前の貴書に余が此の度の佐伯行を以て確かにリアリテイなる故に又た佐伯にもリアリテイ在らしめよとの御忠告は小生喜んで賛成感謝致の処に候 實に人間の生命一日一時一分とも虚なる者あるなし 眠りも実なり語るも実なりかく小生が文学を書く事も實也 皆な生命の一部を成しつゝあるなり 全力をこめて大いに反省致して成す所なくて可ならんや 教師としてかりそめにも子弟の上に立つ可き職分に於てをや 御忠告の段は難有感謝し奉り候

小生其の後益々教師として勉強仕り候間幸に御安心を乞ふ (以下略)

と、ある。大久保から佐伯で大いに真実を尽すようとの忠告を貰い、有難く感謝し、必ず真実を尽して職分を全うするよう努力すると決意を誓っている。真面目で誠実な性格の持主であった。(つづく)